

えしが、兒を引つかんで水に打入る、妻これはとおどろくを、又足をかきて俱に投入、つゞきてみづからも飛込たり、見る人驚といへども救べきよしなく、忽溺れ死たりとなん、大志ある人にはあらねど、其廉耻賞すべし、悲むべし。

〔甲子夜話 二十九〕今年 癸未 六月 政六年 文 梅雨ノ頃、日和續テ炎氣堪ガタキホドナリシガ、土用ニ入りテヨリ雨霖ヲナシ、晝夜陰霽一ナラズ、六月廿一日、増上ノ惠照院普門律師ノモトニ往シニ、大川ノ邊ニ到レバ、川水溢レテ往還ノ道モ殆ンド川中ニ異ナラズ、兩國橋ヲ渡ルニ、川水赤ク、橋下ニ漲落ルサマ急流眼ヲ射ル如シ、橋欄ノ側ニ二人持、或ハ四人持ホドナル石ヲ多ク並ベテ、橋ヲ鎮ムルノ計ヲナス、夫ヨリ増上寺ヘ往タレドモ、歸路心モトナク、八時ノ頃辭シ去リテ又兩國橋ヲ渡ルニ、鎮石ノ外ニ四斗桶ヲ多ク並ベ水ヲタ、ヘタリ、是モ鎮ヲ増サン爲ナリ、水勢ハ彌々マサリ、川シモナル大橋ノ中ホド凹ミ傾キタリ、兩國橋モ橋杭ヤ、動搖スレバ、轎ニ乗テ行クニ昇夫ハ地震ニ歩スルガ如シ。

〔繪本江戸土産〕兩國橋納涼

九夏三伏の暑さ凌がたき日、夕暮より友ども誘引して、名にしあふ、隅田川の下流淺草川に渡したる兩國橋のもとに至れば、東西の岸、茶店のともし火、水に映じて白晝のごとく、打わたす橋の上には、老若男女うち交りて、袖をつらねて行かふ風情、洛陽の四條河原の涼も、これには過じと覺へし、橋の下には屋形船の歌舞遊宴をなし、踊物真似、役者聲音、淨瑠璃、世界とは是なるべし、或は花火を上ゲ、流星の空に飛は、さながら螢火のごとく涼しく、やんや／＼の響聲は河波に響き、ておびたゞし、此橋は往昔万治年中初めて懸させたまひ、武藏下總の境なるよし、俗にしたがひ給ひて兩國橋と號たまふとかや、

〔都の手ぶり〕兩國の橋